

## 悔い改めによる聖さへの成長

3:1 そのころ、洗礼者ヨハネがユダヤの荒野で宣教し、2「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言っていた。3 この人は、預言者イザヤを通して語られた者である。

預言者イザヤを通して語られた方である。

『荒野で叫ぶ者の声。主の道を整え、  
その道を備えよ』と叫ぶ者の声である」

4 ヨハネの衣はらくだの毛でできており、腰には皮の帯を 巻いていた。彼の 食物は イナゴと 野の蜜であった。5 エルサレムやユダヤ全土、ヨルダン川流域の各地から人々が彼のもとにやって来て、6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

(7) しかし、ファリサイ派やサドカイ派の者たちが、洗礼を受けにやって来るのを見て、イエスは彼らに言われた。「毒蛇の子らよ。いったい誰が あなたがたに 悔い改めよ と告げたのか 迫り来る 怒りから 逃れよと？

8 悔い改めにふさわしい実を結べ。9 「われわれはアブラハムの子孫だ」と自負してはならない。神はこれらの石からでも、アブラハムの子孫を立てることができるのだ。10 斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木は、すべて切り倒されて火に投げ込まれる。

(11) 「わたしは悔い改めのために、水であなたがたにバプテスマを授ける。しかし、わたしの後に来る方は、わたしよりも力がおありで、その方の靴のひもを解くことさえ、わたしはできない。」

担う。彼は聖霊と火をもってあなたがたにバプテスマを授ける。12 そのふるい棒は手にあり、打ち場を清め、麦を倉に集め、もみ殻を消えることのない火で焼き尽くす。」

はじめに

今朝はまず、出エジプト記 3 章 5 節から始めましょう。燃えるいばらの前で神がモーセにこう告げられました。「近づいてはならない。あなたの立っている場所は聖なる地だから、あなたの履物を脱ぎなさい。」

この聖句は聖さの本質を明らかにしています。それは神の臨在と結びついていのです。神の臨在が普通の地を聖なる地に変えるのです。神の民が神に近づくとき、私たちは神の聖なる性質を反映するよう召されています。「あなたがたは聖なる者となりなさい。わたし、あなたがたの神、主は聖なる者だからである」（レビ記 19:2）。

聖なる者となることは、聖なる方へと近づくことです。これには畏敬の念と変革が求められます。モーセの場合、神に近づく前に履物を脱ぐ必要がありました。これは、聖なる状態が罪からの分離と変革を要求することを示す良い教訓です。

変革の重要な側面は悔い改めである。悔い改めとは何か？

悔い改め（μετάνοια、メタノイア）は本質的に心の転換である。

聖書的・神学的文脈では、それは心と方向性の転換を意味する。

悔い改めるとは、人生の根本的な再考と方向転換に取り組むことです。それは罪から離れ、神に向き直ることを意味します。しかし、罪とは何でしょうか？

## I. 罪

○ まず、罪の概念に関連する二つの一般的な聖書用語から見ていきましょう。

1. 「不義（iniquity）」は、曲がったもの、歪んだものを指します。それは

歪んだ内面の性質であり、私たちが堕落へと傾かせるものである  
そして悪事。例として—(a)「牧師のために祈ろう、彼が結婚問題を抱えていると打ち明けてくれた」といった、親切な祈りの依頼を装った噂話に手を染めること、あるいは(b)他人の仕事の欠点を絶えず指摘し、会議で些細な間違いを正し、「ただ事実を伝えているだけだ。誰かが言わねばならない」と主張すること。私たちは自分を正直な批評家だと正当化する。

2. 背きとは境界線を越えることであり

関係における信頼を損なう境界線を越えることです。これは故意に線を越え、意図的に従わない行為であり、反逆や反抗に等しいものです。例：自己利益のための嘘、自分にとって間違っていると知りながらポルノを見る、あるいは交わした約束を破ること。

○ 要約すると：不義は内面の歪みである。

違反は神の境界に対する故意の反抗である。

不義と違反が罪の具体的な表現であるならば、罪そのものの根本的な本質とは何か？

○ 罪とは「的を外す」こと、すなわち私たちが到達すべき「目標」に届かないことです。

それは神が人類に与えた本来の意図に満たない状態です。

○ この的、すなわち意図とは何だったのか？神はご自身の像に似せて人間を創造された。

私たちは神の似姿として造られ、創造界において神を代表し、神の性質と栄光を映し出すために存在した。神の設計は、私たちが神と共に世界を治め、守るパートナーとなることだった。

○ しかし私たちは罪を犯し、神の栄光に及ばなかった。神の本来の設計の目標—すなわち神の栄光を映し出し、神を代表し、神の創造物を責任を持って治め、守る—を達成できなかったのである。

○ 本質的に、罪とは神の私たちに対する本来の設計—神の栄光を映し出し、神を代表し、神の創造物を忠実に守る—という目標を見失うことです。

○ 洗礼者ヨハネのメッセージは明快で簡潔であった。3章2節で彼は

「悔い改めよ。天の御国が近づいたからである」と宣言した。3 これは預言者を通して語られた方である

イザヤが語った方である。

『荒野で叫ぶ者の声。主の道を整え、  
その道を備えよ』と叫ぶ者の声である」

- 端的に言えば、神は王として民を治めるために戻り、地上で御国を築かれる。罪から離れ、神に立ち返れ。再び神の栄光を映す準備をせよ！
- 3:5 「エルサレムとユダヤ全土、ヨルダン川流域の各地から人々が彼のもとにやって来て、6 自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」

## II. 自己義認の罪

○ 3:7 節には注目すべき興味深い記述がある——

「しかし、ファリサイ派やサドカイ派の多くが  
が洗礼を受けに来るのを見ると、彼らに言った。『毒蛇の子らよ。来るべき怒りから逃れるようにと、誰が警告したのか。8 悔い改めにふさわしい実を結べ。(9)『われわれはアブラハムの子孫だ』と心の中で思うな。言っておくが、これらの石からでも子孫を立てることができるのだ」  
神はアブラハムのために子孫を立てることができる。10 斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はすべて切り倒され、火に投げ込まれる。」

○ この話をどう思うか。サドカイ派は神殿を中心とする祭司的・政治的宗教指導者たちであった。ファリサイ派は宗教教師であり民衆の中の律法の解釈者であった。なぜ洗礼者ヨハネは彼らを蛇の子どもと呼び、これほど厳しく非難したのか。本文は明らかに悔い改めと関係があることを示唆している——「悔い改めにふさわしい実を結べ」と

「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」。

○ 彼らは宗教指導者であり教師ではなかったのか？彼らは善良な人々である。では、いったいどんな「良い実」を实らせなかったというのか？

洗礼者ヨハネを怒らせたのは何だったのか？マタイによる福音書の残りを読めば明らかになる二つの側面を提示したい。

1. 彼らは「頭はでかく、口は大きく、体は小さい」人々でした。多くを知り、多くを語るが、実際に行うことはほとんどありません。

聖書の知識を蓄え、教義を教え、セミナーに出席し、宗教的真理について自信満々に語る一方で、その行動は言葉に大きく及ばないのです。

マタイ 23 章でイエスはファリサイ派についてこう語りました：2 「ファリサイ派はモーセの律法の公式な解釈者である。3 だから彼らが教えることはすべて実行し、守れ。しかし彼らの行いは見習ってはならない。彼らは自ら教えたことを実践しないからだ。

4 彼らは人々に耐えがたい宗教的義務を押し付けながら、自らその重荷を軽くしようと指一本動かそうとしない。」

私たちの経験にも当てはまることではないでしょうか。信仰について語ることは

実践するより容易であり、他人に教えることは自ら従うより容易であり、  
霊的に見えることは実際に仕えることより容易です。この不均衡は、知識に偏重し、  
声高に語るが従順さに欠ける信仰を生み出します。私たちは神の王国について語りながら、実際に仕えることには消極的です。

奉仕することより。この不均衡は、知識に偏り、言葉は雄弁だが従順さに欠ける信仰を生み出す。私たちは王国について語るが生きることより語ることの方が多いのです。

もしそれが私たちに当てはまるなら、知っていることや教えていることを実践することで「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」必要がある。  
知ることや話すことに加えて、もっと行動しなければならない。

2. 第二の側面は、一般的に「道徳的免罪符」と呼ばれる現象に関わる。  
道徳的免罪符とは、人が善行を行った後、それが悪事を働く許可を与えたと感じる状態を指す。言い換えれば、自らの善行が、悪い行いを正当化する「功績」を稼いだと信じるのだ。

イエスはマタイ 23 章でファリサイ派についてこう語りました：「…あなたがたは、わずかな収入からさえ十分の一を納めることに注意を払っている」  
ハーブ gardens, but you ignore the more important

律法の重要な側面—正義、憐れみ、誠実さ…25 …あなたがたは、杯や皿の外側をきれいにすることに注意を払うが、内側は貪欲と放縦で汚れている！」

「道徳的免罪」の背景にあるのは、善行を積みば悪事を働いても許されるという考え方だ。これは救いが行いによるという思考様式である。救いは善行にかかっているという信念ゆえ、私たちは自らの行いを精神的なスコアカードで記録する。善行が悪行を上回っていると信じている限り、神の前で安全で受け入れられていると考えるのだ。

これはあなた自身の経験に当てはまるだろうか？善行によって救いを獲得できると思い込んでいる。だから善行を精一杯行い、十分な善行を積んだ後は、たまに一つや二つの悪事にふけるのも許されると感じているのではないか？

もしそれが私たちの姿なら、悔い改めなければなりません。自らの行いによる救いという考え方を捨て、代わりに、キリストの十字架に示された神の恵みの中にのみ救いがあるという深い確信へと向き直らなければならないのです。

イエスの十字架上の死のみが私たちの罪を取り除くことができ、いかなる善行もこれを成し遂げることはできません。エペソ人への手紙 2 章 8-9 節が明らかにしているように、「あなたがたは、恵みによって、信仰によって救われたのです。それは、自分自身か

ら出たものではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることができないためです。」

私たちが行う善行は、救いの根源ではなく、その実です。私たちは救われたからこそ善行に励むのであって、救われるために善行を行うものではありません。続くエペソ人への手紙 2 章 10 節が宣言するように：

「私たちは神の作品であって、キリスト・イエスにあって造られたのです。それは、私たちが善い行いをするためであり、神があらかじめ備えてくださったその善い行いを、私たちが歩むためなのです。」

応答

今朝、私たちは聖さについて考察し、その核心が神の御前にいることにありと学びました。聖なる者となることは、聖なる神に近づくことであり、それには変革が求められます。この変革は悔い改めから始まります。すなわち、心と考えの方向性を変え、罪から離れ、神に向き直すことです。罪から離れるには、二つのものを放棄することが必要です。第一に、私たちの不義—内なる性質の歪み—であり、第二に、私たちの背き—神の境界に対する故意の反抗—です。

私たちは神の栄光を映すために造られました。私たちの利己心と誤った選択がその映しを損ないましたが、神はそれを回復することができます。イエスは十字架で死に、私たちの罪を取り除くことで、壊れた像を贖われました。罪のない方でありながら、神は罪のない方を私たちのために罪とされたのです。それは、私たちがキリストにおいて神の義となるためでした（Ⅱコリント 5:21）。このように、キリストは一度、罪のために、義なる方が不義なる者のために苦しまれ、私たちを神のもとへ導かれたのです（Ⅰペテロ 3:18）。洗礼者ヨハネの招きに対する二つの異なる応答が見られます。

人々が罪を告白して彼のもとにやって来ると、彼は彼らに洗礼を授けました。同様に、私たちがイエスに罪を告白するとき、彼は真実で義なる方であり、私たちの罪を赦し、すべての不義から清めてくださいます（ヨハネの手紙一 1:9）。

しかし、宗教指導者たちが悔い改めにふさわしい実を結ばずに来たとき、ヨハネは彼らを「毒蛇の子ら」と呼び、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて火に投げ込まれると警告した。

ここから、私たちは自らの自己義認を悔い改めることを学ばねばならない。従順な生活のない、単なる言葉や知識による義の背後には隠れられない。また、救いは善行によるという誤った信念に固執し、時折の善行を継続的な罪の免罪符として用いることもできない。

ですから、今朝私たちが応答するとき、私たち一人ひとりへの招きは同じです。すなわち、誠実な告白をもってキリストのもとに来ること、赦しのためにキリストの成し遂げられた御業のみを信頼すること、そして御霊によって、悔い改めの真の実を結ぶ人生へと向きを変えることです。それは、主の栄光のためにますます変えられていく人生なのです。